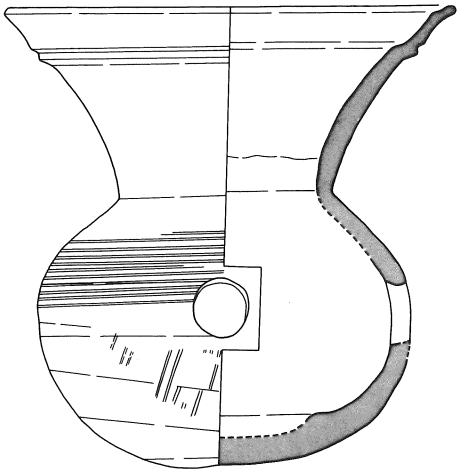
一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ

上野第1遺跡（平原地区・米田地区）

上野第2遺跡

手崎遺跡（2・3次）



1994

大分県教育委員会

表紙　手崎遺跡住居203出土須恵器

カラー図版　手崎遺跡２次調査区遠景

例　　言

1. 本書は、平成５(1993) 年度に実施した一般国道210号日田バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 調査団の構成は以下のとおりである。

調査指導委員　畑中　健一（北九州大学教授）
　　柳沢　一男（宮崎大学教授）
調 査 委 員　末広　利人（大分県教育庁文化課課長）
　　岡　　忠生（大分県教育庁文化課課長補佐）
調 査 主 任　清水　宗昭（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第１係長）
調査担当者　田中　裕介（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第１係主任）
　　高畠　　豊（大分県教育庁文化課埋蔵文化財第１係嘱託）
調　査　員　坂本　嘉弘（県文化課主査）　玉永　光洋（同主査）　西　　哲弘（同主査）
　　小林　昭彦（同主査）　吉田　　寛（同主事）　吉武　牧子（同嘱託）

上記関係者のほか、賀川　光夫（別府大学教授）、土居　和幸（日田市立博物館学芸員）、行時　志郎（同学芸員）氏などの視察と助言をえた。

また日田考古学同好会の原田勝宏、梶原秀彦、桑野洋輔、田中常雄の諸氏には様々な協力を得た。

4. 本書の編集は田中があたり、執筆は田中と高畠が分担し執筆者名を文末に記した。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　歴史的・地理的環境 …… 2
Ⅲ　上野第１遺跡（平原地区・米田地区） …… 4
Ⅳ　上野第２遺跡 …… 8
Ⅴ　手崎遺跡（２・３次） …… 9
Ⅵ　まとめと課題 …… 19

Ⅰ　はじめに

一般国道210号日田バイパスは、九州横断自動車道の開通による日田市街地の交通渋滞緩和を目的として、市街南側の三隈川南岸台地上に計画されたものである。路線周辺には、古墳をはじめ多くの遺跡が存在しているが、従来考古学的調査のあまり行なわれていなかった地域であり、未知の遺跡の存在が予想された。そこで県教育委員会では、建設省九州建設局大分工事事務所と委託契約を結び、文化課が事前調査を実施することとなった。89年度から92年度にかけての4カ年における調査で、旧石器時代から近世にいたる数多くの遺跡が判明し、中でも奈良時代の大集落跡である上野第1遺跡と縄文時代の住居跡を検出した手崎遺跡は注目を集めた（註1）。今年度は上野第1遺跡の西端の平原地区と、上野第1遺跡米田地区・上野第2遺跡ＡＢ区の調査を行なったのち、手崎遺跡交差点部分の調査を行なった。

1)、調査の経過

昨年度の試堀結果にもとずいて、4月から上野第1遺跡平原地区ＥＦＧ区の本調査に入り、5月末からは米田地区の調査に移り、6月末からは上野第2遺跡の本調査を並行して行なった。そこでは予想された奈良時代遺構はまったく見つからなかったが、近世の畑地境界溝や近世水田を確認した。さらに手崎遺跡2次調査（Ｅ区）を7月から8月にかけて、3次調査（Ｆ区）を10月から12月にかけて行ない、縄文時代各時期の包含層や弥生時代から奈良時代にいたる住居跡群を確認した。考古学的発掘調査と並行して広域水田遺跡分布調査の方法である現水田の水掛かり調査と地名聞き取り調査を手崎遺跡周辺において実施し興味深い成果をえた。(註2)。

2)、遺跡の概要

上野第1遺跡（平原地区）近世溝4条　土壙1基．ピット群**（米田地区）**近世水田

上野第2遺跡　近世水田

手崎遺跡　縄文時代早前期・後晩期包含層 晩期土壙1基　弥生時代後期住居跡1軒　古墳時代中期住居跡2軒・後期住居跡1軒　奈良時代住居跡3軒・土壙9基　中世掘立柱建物3棟　（田中）

註1　友岡信彦ほか『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』 1990 大分県教育委員会
田中裕介『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』 1991 大分県教育委員会
田中裕介『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』 1992 大分県教育委員会
田中裕介『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』 1992 大分県教育委員会
註2　『豊後国田染荘の調査』宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1986・87

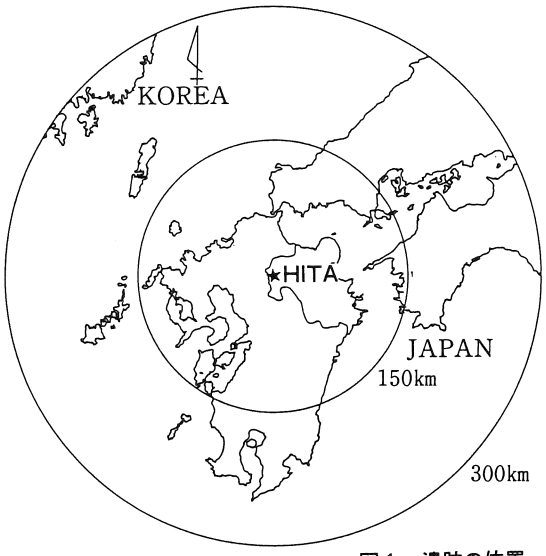


図1　遺跡の位置

Ⅱ　歴史的・地理的環境

日田盆地の地理　日田市は、現在の大分県の西部にあたるが、九州全体の地形からみた場合ほぼ九州の中央に位置する（図１）。古代における西海道豊後国日田郡にあたる。有明海にそそぐ筑後川の上流部にあたる三隈川が東西に貫流し、日田盆地の地形を特徴づける。盆地中央の沖積地の周辺には河岸段丘や『原（はる）』と呼ばれる台地が周辺に広がる。遺跡の多くはこの段丘や台地上に立地している。三隈川南岸は、沖積地と長者原台地からなる石井地区がその西部に、銭淵・高瀬段丘とその背後の陣が原台地からなる高瀬地区を東部にもち、上野原台地は両者の中間に位置する。台地はいずれも比高 30mほどで、標高は海抜 130m台である。

三隈川南岸の遺跡　この三隈川南岸には日田盆地全体の遺跡立地と共通する多くの遺跡がある(図 2)。台地上には点々と旧石器・縄文時代の遺跡が残されており、長者原遺跡(24)、誠和神社裏遺跡、手崎遺跡(4)、大部遺跡(3)では、縄文早前期、手崎遺跡(4)上野第 1 遺跡(14)では縄文後晩期の遺跡を確認している。また長者原、上野台地と陣が原台地の縁辺部には弥生時代の集落が広がる。古墳時代になると集落の中心は台地を下って、石井沖積地や高瀬段丘に移動する。台地縁辺部は古墳時代には墓地として利用されていたらしく、護岸寺古墳群(17)、穴観音古墳(22)が台地に立地する。また奈良時代になると石井地区と高瀬地区に条理遺講が残されており、それを基盤に石井郷が設定されたと推定される。　（田中）

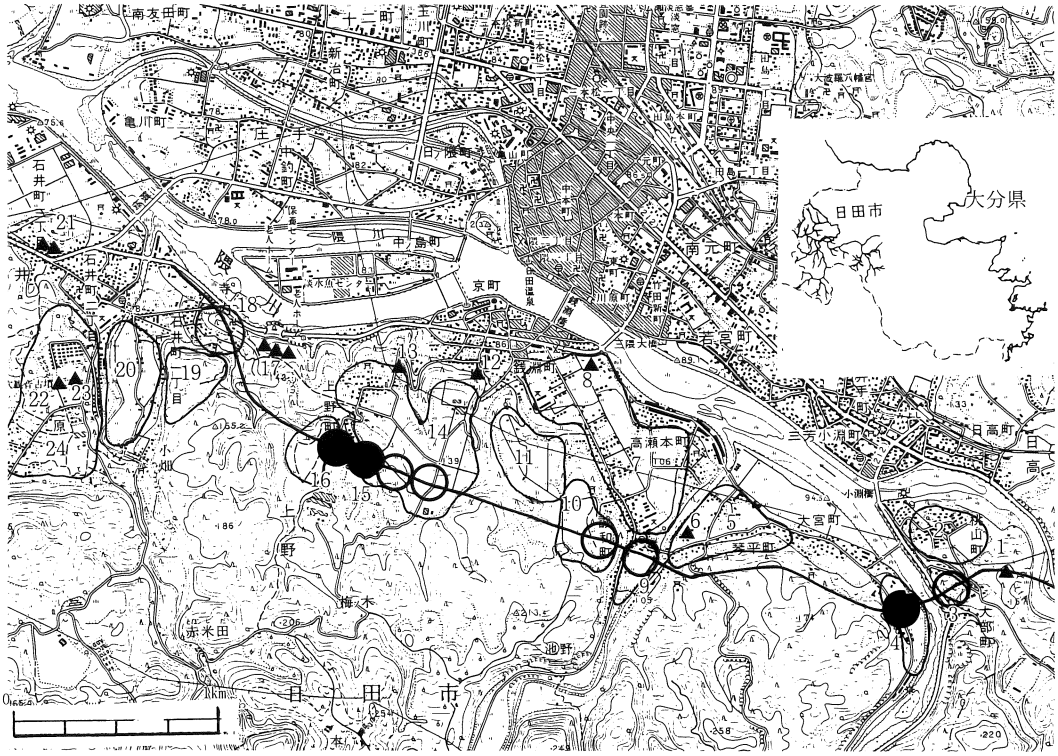


図２　三隈川南岸の路線と日田バイパスの路線（2/3）

1. 大部千人塚古墳　2. 桃山遺跡　3. 大部遺跡　4. **手崎遺跡**　5. 惣田遺跡　6. 惣田塚古墳　7. 高瀬条理　8. 姫塚古墳　9. 高瀬遺跡　10. 陣が原辻原遺跡　11. 陣が原遺跡　12. 銭淵石棺　13. 姥塚古墳　14. 上野第１遺跡　15. **上野第１遺跡（平原・米田地区）**　16. **上野第２遺跡**　17. 護岸寺古墳群　18. 護岸寺遺跡　19. 赤塚遺跡　20. 尾坪遺跡　21. ガランドヤ古墳群　22. 穴観音古墳　23. 倉園古墳　24. 長者原遺跡

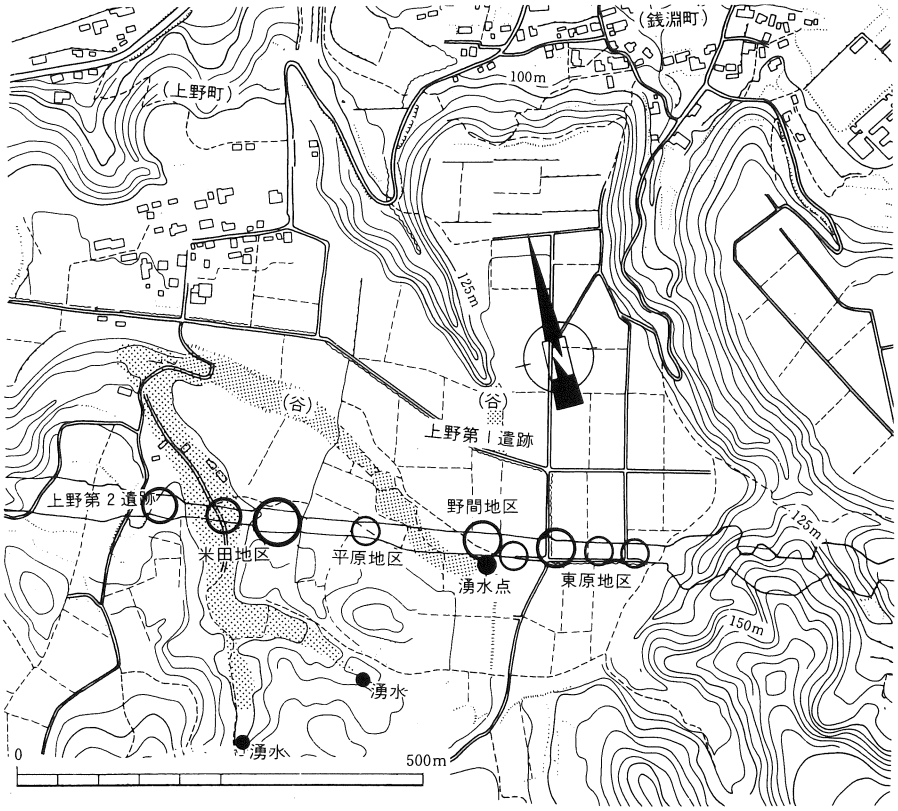


図３　上野第１・２遺跡と周辺地形

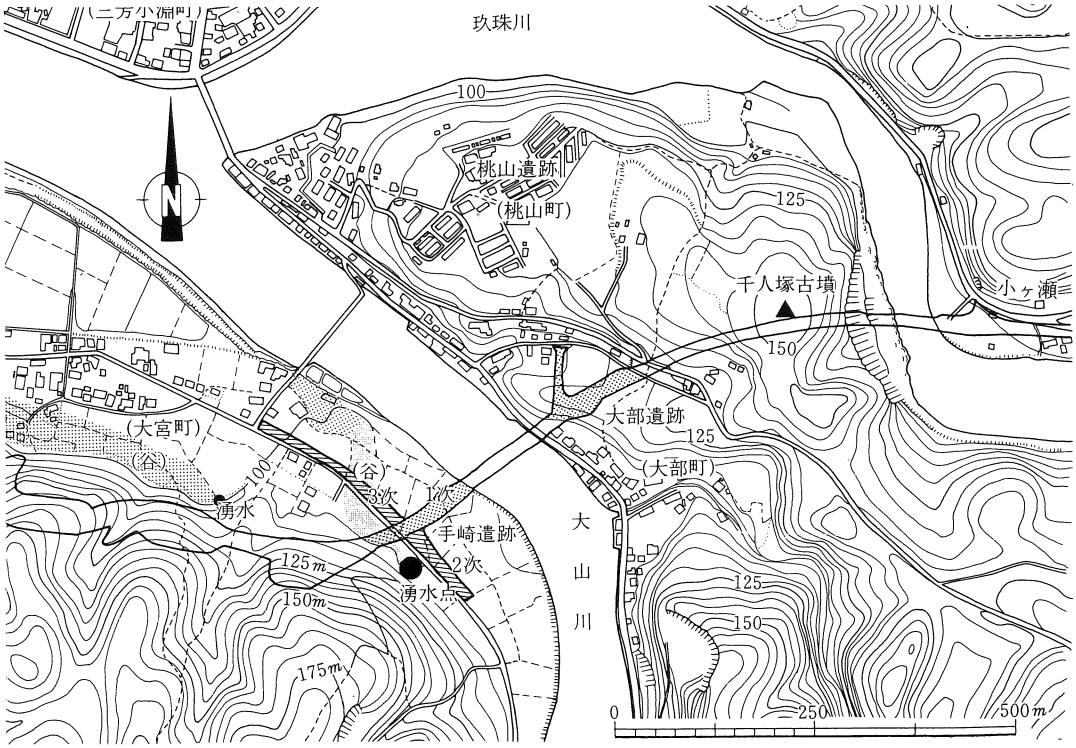


図４　手崎遺跡と周辺地形

Ⅲ　上野第１遺跡（平原地区・米田地区）

1)、遺跡の位置（図３・５）

上野第１遺跡は、日田市大字上野に所在する。遺跡の立地する上野台地は三隈川南岸に東西に連なる台地群の１つである。標高 130 ～ 140ｍで東西約 600ｍ南北約 600ｍの広さをもち、北側は銭淵の低段丘をへて三隈川に落ち、東側は比高 20ｍの谷を挟んで陣が原台地が隣り合う。南側は山地形に変わる。台地の西側は、米田地区の谷を挟んでもうひとつの台地があり、上野第２遺跡として周知されている。上野台地は平坦な地形で、台地内に比高２～５ｍの谷が３条はいり、そのうち調査区を横切る谷の谷頭に自然湧水があるほか、米田地区の谷を南にさかのぼると字『二又』に２箇所の湧水がある。

2)、遺跡の状況

現在台地上は西北部の上野集落と南東部の浄水場・病院を除いてすべて水田化されている。この地目は 1913（大正２）年の圃場開発事業によるもので、当時水源のない上野台地に水を引くために大山川の上流から水路を開削しており、三隈川南岸台地上一体を水田開発する大事業の一環であった。水田化以前の地形は小字地名と地元住民の伝承、それに発掘調査そのものによって明らかとなった。それによれば台地全体に畑地が広がり、現在よりも起伏に飛んでいたようである。畑地は台地全体に空き地なく広がり、境界には溝がきられていた。台地内の湧水のある谷は古くから水田として使用されていたと思われ『しょうやのた』と伝えられている。水田化の際に台地上の小起伏は均されており、そのため遺跡は部分的に削平されたり、逆に埋められたために保存のよい部分があった。

3)、既往の調査と今年度の調査区（図３・４）

上野第１遺跡の 500ｍにおよぶ調査区を、地形の変化にしたがって４つに分割し小字名を付して東から東原地区・野間地区・平原地区・米田地区とした。各地区内は旧水田区画にしたがって、

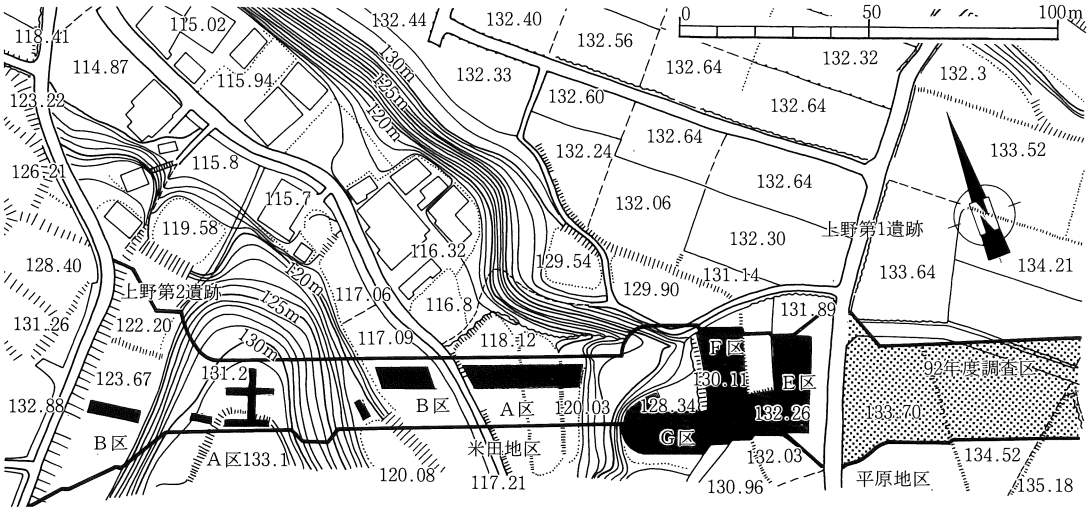


図５　上野第１・第２遺跡の調査区（1/2000）

東原地区にA～D区、野間地区にE～M区、平原地区A～G区、米田地区にA・B区を設定し調査をおこなった。そのうち東原地区A～C区は90年度に、東原地区D区・野間地区・平原地区A～D区は92年度に、平原地区E～G区と米田地区は今年度に本調査を実施した(註1)

なお、台地上では91年に日田市立博物館によって、上野第1遺跡北側の南北方向の谷に沿う市道建設にともなう発掘調査を実施しており水田下に隠れた谷地形を確認している(註2)。また92年には県教育委員会によって台地東北隅の平坦面が玉川バイパス建設に伴って試掘調査がおこなわれたが、遺構・遺物は何ら発見されなかった(註3)。 (田中)

註1　1頁註1文献参照

註2　行時志郎『上野切畑山遺跡』(日田市埋文報5) 1992　日田市教育委員会

註3　調査担当者高橋徹氏より教示。

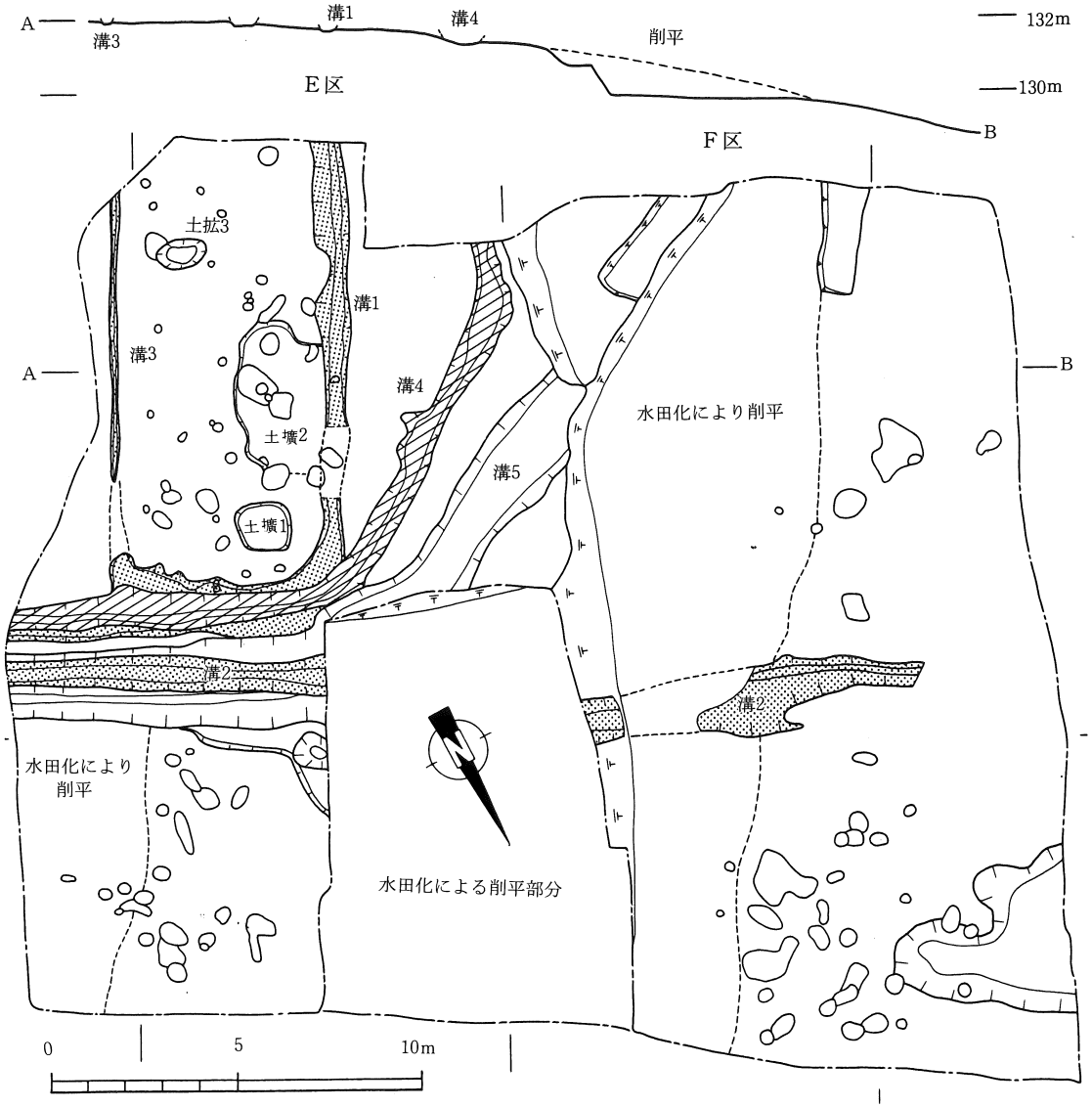


図6　上野第1遺跡（平原地区）E・F区遺構配置図

4)、平原地区Ｅ～Ｇ区（図５・６）

この地区は上野台地の最西端にあたり、平坦面から斜面にかけてを全面調査した。調査の第１の目的は、上野第１遺跡の奈良時代集落の西端を確認することにあった。しかしＥ～Ｆ区では奈良時代の遺構はまったく検出されず、水田化による削平を考慮してもなおこの地区には遺構は存在しなかったものと考えられる。したがって平原地区の奈良時代建物群はＢ区ないしＣ区で終わっていると考えられる。かわって近世・近代の畑地境界溝を確認し、この台地の土地利用の在り方をしめす遺構を検出した。

縄文時代　Ｅ区土壙２は浅い不整形の土壙で縄文時代後晩期の土器片が若干出土した。

近世・近代　Ｅ～Ｆ区は台地が平坦な地形から斜面へと変換する場所にあたる。Ｅ区・Ｆ区のそれぞれ東半分は1910年代の水田化による削平で溝の下部を除いて、遺構は消失しているが、逆に西半分は埋め立てられているため遺構の保存状態は良好であった。

畑地境界溝　耕作土の充満した断面Ｕ字形の溝を５条検出した。溝はそれぞれ切りあっており、畑地の境界を拡張しながら作りなおされていく状況が観察される。まず溝１・３は同時期の掘削で、Ｌ字型の溝１に溝３を付設して長方形の区画を作り出し、北側に並行して斜面に直交する溝２が作られている。この状態が最初の形態である（第１期）。次に溝１・３が廃絶して溝４が掘りなおされており、長方形区画が不整形の区画に変化している（第２期）。次に溝５が溝４の外周を廻るように掘られ、この時点で溝４は埋没し溝５に交替する。この拡大の際に溝２はすでに埋没しており、溝５は溝２の上に重なるように作られている（第３期）。このようにまず第１期の畑地境界溝の設定時には、台地の地形を考慮しながらもかなり人為的に方形を意識して区画がなされているが、第２期第３期になるにしたがって耕作の状況等に応じて畑地の区画が不整形に変化する様子が認められる。第１期の時期は明確にすることはできないが、近世陶磁器の量が18世紀後半から増加し、19世紀のものが最も多い状況からみて第１期の畑地境界溝の設定時期はその頃であろうかと推定される。なお第３期の終わりつまり溝５の廃絶時期は、溝が水田造成時の造成土によって一気に埋没している状態から1910年代であると押さえられる。

出土遺物　（図７）この地区から縄文土器片・須恵器片等も若干採集されたが、大部分は近世近代の陶磁器である。図７に示した２点は、１が18世紀後半、２が明治期のものである。

（田中）

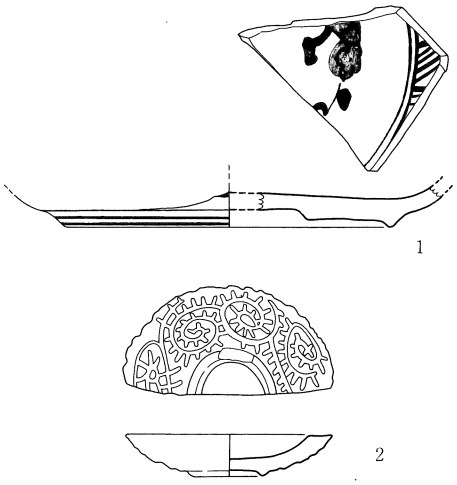


図７　平原地区Ｅ・Ｆ区出土遺物（½）

写真１　上野第１遺跡平原地区Ｅ～Ｇ区遠景

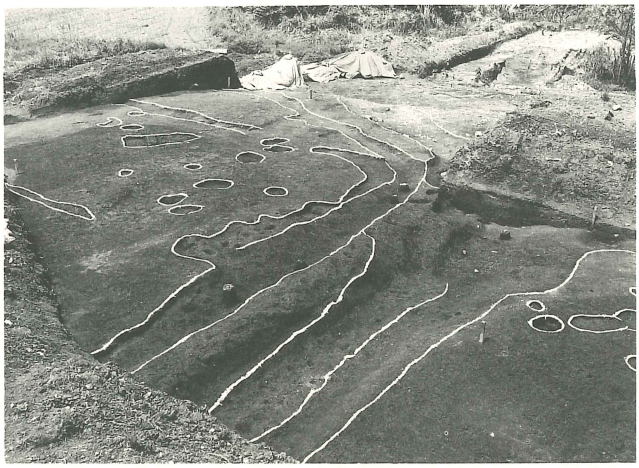


写真２　平原地区Ｅ～Ｆ区の畑地境界溝

写真３　平原地区Ｇ区全景

5)、米田地区（図5）

この地区は上野第1遺跡と上野第2遺跡の台地を分かつ谷底の地区である。現状は谷の中央に小川が走りその両側に水田が開かれている。野間地区で湧水を利用した奈良時代水田が検出されており、この地区の水田がいつの時代のものかを判断するために幅5mの調査区を設けてほりさげた。その結果現在の水田は1910年代の台地上の水田化時に引いた水路からの落ち水を利用して作られたもので、それ以前の谷の地形は小川に向かって落ちる緩斜面をなし、畑地あるいは山林として利用されていたと推定された。　（田中）

写真4　米田地区全景

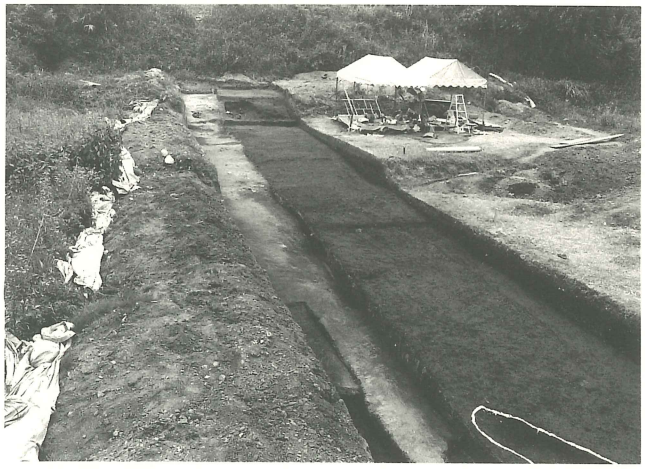


写真5　米田地区A区

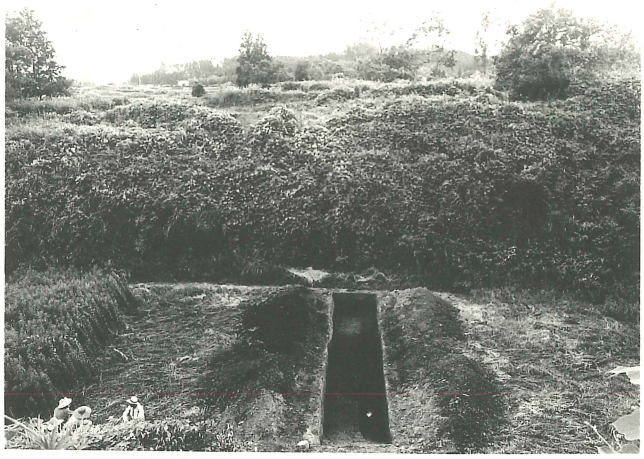


写真6　上野第2遺跡の試堀区

Ⅳ　上野第2遺跡（AB区）

A区は上野第2遺跡の所在する向原台地の東端にあたる尾根の上、B区は台地上に入る谷の部分で、いずれも現状は水田になっていた。この地区では従来弥生時代の遺物が採集されており、そのことを念頭において試掘調査を行なった。その結果A区ではすでに1910年代の水田造成時に削平されており遺構はまったく検出されなかった。B区の谷部水田は上流に湧水もなく現在の水田は新しいもので米田地区と同様の状態であった。　（田中）

V　手崎遺跡
（2・3次）

1)、遺跡の位置（図2）

手崎遺跡は大山川の西岸の高瀬河岸段丘上のもっとも奥まったところに位置している。標高約100m。大山川との比高10mで、水害の影響の少ないきわめて安定した場所に立地する。くわえて遺跡の西南側山裾に自然湧水点があり、この湧水が往時の生活を支えたことは疑いない。

2)、遺跡の現況（図8）

手崎遺跡は調査地点の南北に広がるが、現状は全体が水田となっていた。住民によれば水田化したのは1920年代の昭和初期で、それ以前は桑畑であった。水田はわずかに湧水点から流れ落ちる小さな谷筋でわずかにおこなわれていたにすぎない。現水田は旧地形の削平と盛土によって造成されている。地名の聞き取りと水路調査によれば、手崎遺跡の湧水点から流れ落ちる谷は「ひやけのた」と呼ばれ、手崎遺跡の北半

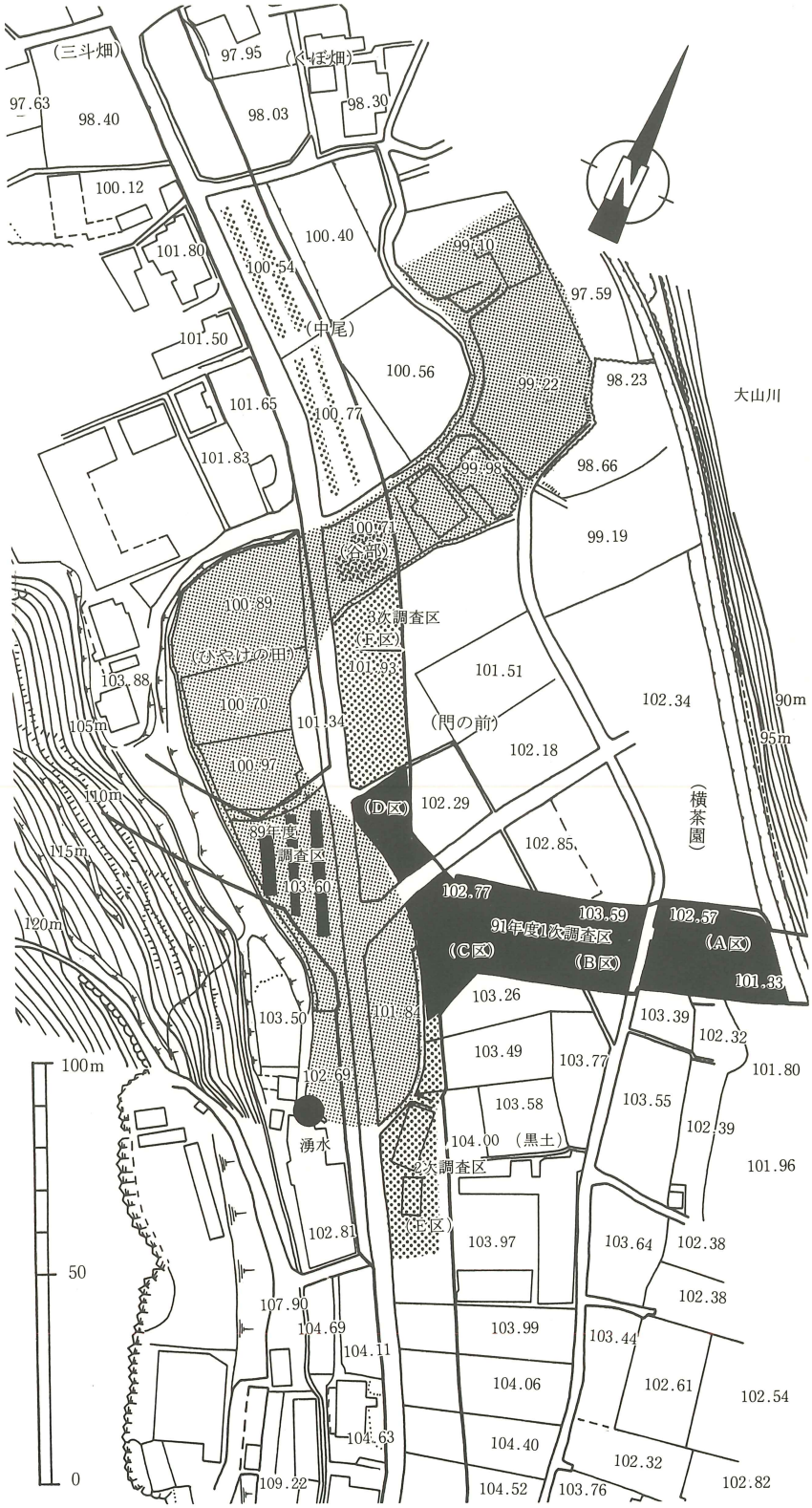


図8　手崎遺跡の調査区と小字『手崎』内の地名

は「門の前（もんのまえ）」、南半は「黒土（くろつち）」、大山川沿いの一段低い部分は、横茶園（よこちゃえん）」、湧水谷の北側の丘陵部が「中尾（なかお）」と呼ばれ、その北側は「くぼ畑（くぼばたけ）」「三斗畑（さんどばたけ）」といい、三斗畑の西側のもう一つの湧水谷は「古田（こでん）」と呼ばれていた。以上の地名は小字手崎の中のしこ名である。地名から推定されることは、ひやけの田と古田の２箇所の湧水谷は古くから水田として開発され、それ以外の台地部分は畑地として利用されていたのではないかということである。これを証明するように現在の水田水がかりをみてみると、ひやけの田と古田は現在でも湧水を利用し、黒土・門の前を流れる主水路はひやけの田を横切って中尾に流れる際にひやけの田の水路と立体交差している。また今年度調査したＥ区では近世の畑地境界溝を検出しており、黒土が水田以前は畑地であったことを証明している。したがって湧水谷以外の水田は1920年代に開発されたという記録と合致したことになる。

3)、遺構と遺物

91年度の調査では、次のような状況であった。Ａ地区は大山川に接した段丘中央部より2mほど低い地区で縄文早晩期の包含層が自然層の上に堆積していた。Ｂ地区は調査区最高所で水田床土を除去するとすぐに礫層になり遺構は検出されなかった。Ｃ・Ｄ地区は縄文早期および後晩期の２層の縄文包含層の堆積があり、その上から古墳時代・奈良時代・中世の遺構が重なってほりこまれていた。

今年度調査のＥ区では１次地区調査と同じように縄文時代早前期と後晩期の２層の包含層や弥生・古墳時代の遺構が、Ｆ区では古墳時代・奈良時代の遺構が重なっていた。

以下時代別にふれていく。　　（田中）

旧石器時代・縄文時代

縄文時代の遺構は、Ｅ地区において小土壙を１基検出した。Ｅ地区では、この土壙を中心として早期から晩期にかけての包含層が分布し、砂層をはさんでさらに下位からも遺物が出土した。Ｆ地区は削平のため包含層がほとんど残っておらず、早期・前期の遺物が散漫に出土したのみである。以下Ｅ地区を中心に記述する。

縄文時代の遺構は土壙118のみで、晩期前半の粗製深鉢等が出土した。そのほかは包含層からの出土である。Ｅ地区では弥生・古墳時代住居址の検出面が縄文時代の包含層中にあり、それから砂層までの間から、早期早水台式から晩期までの各時期の遺物が出土している。しかし20cm程の厚さしかないため、押型文土器がより下位から出る傾向はあるものの層位的に明確に分離することはできなかった。

さらにこれより下位にある厚さ40cm程の砂層中とその下にある硬くしまったローム状土層の上面からも遺物が出土した。

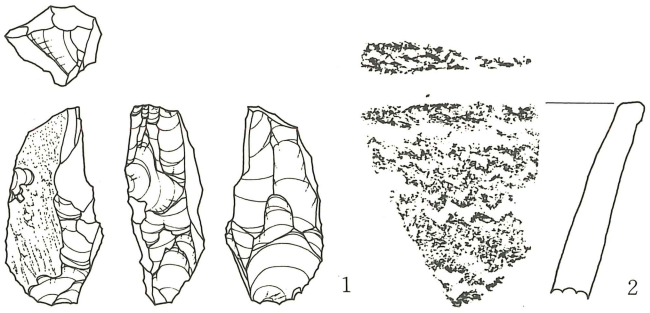
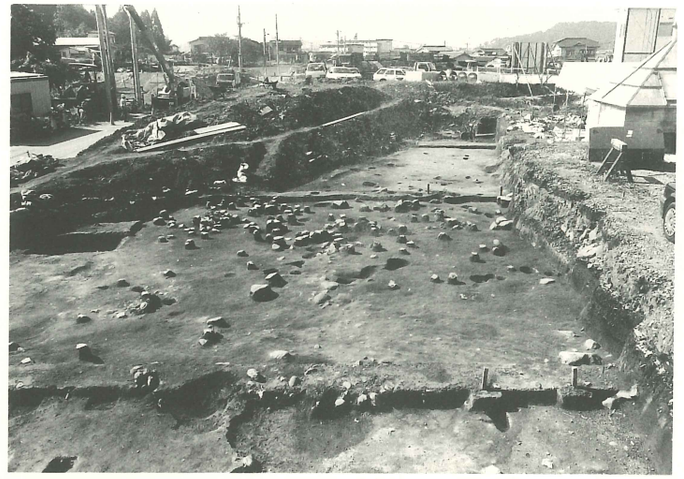
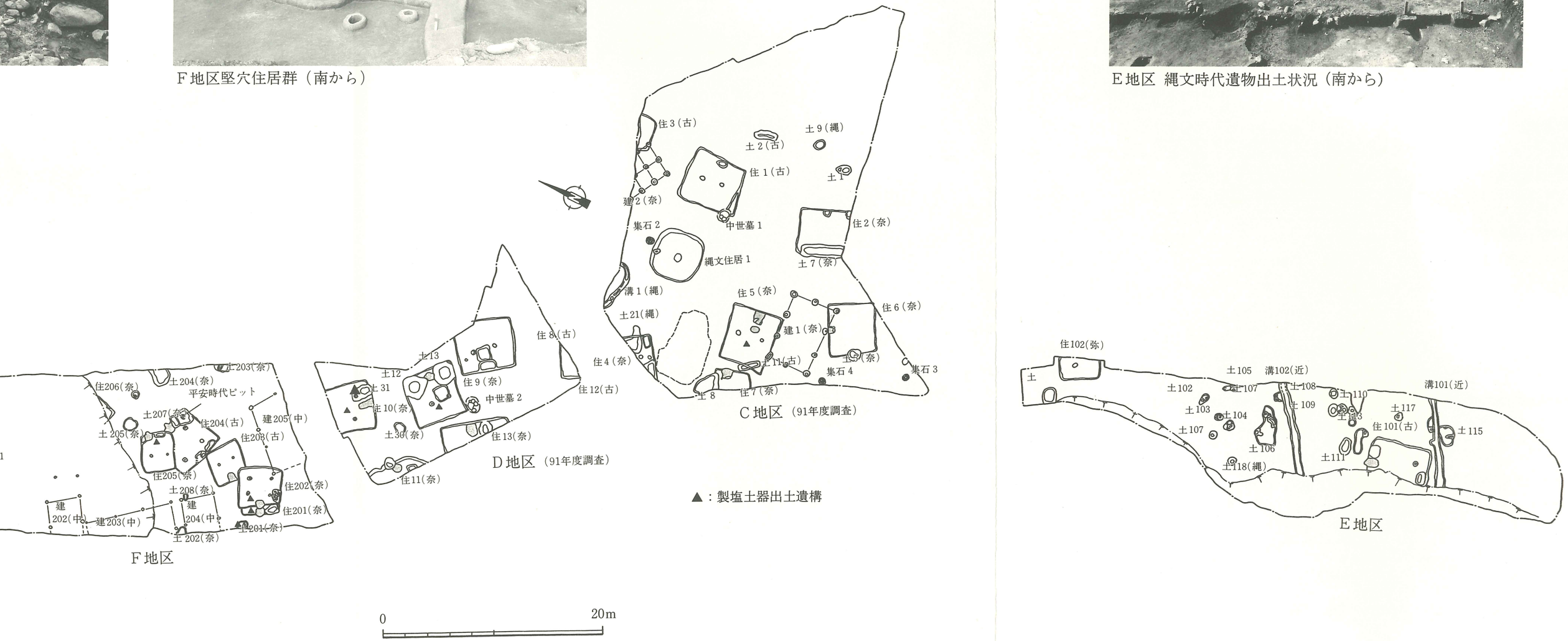


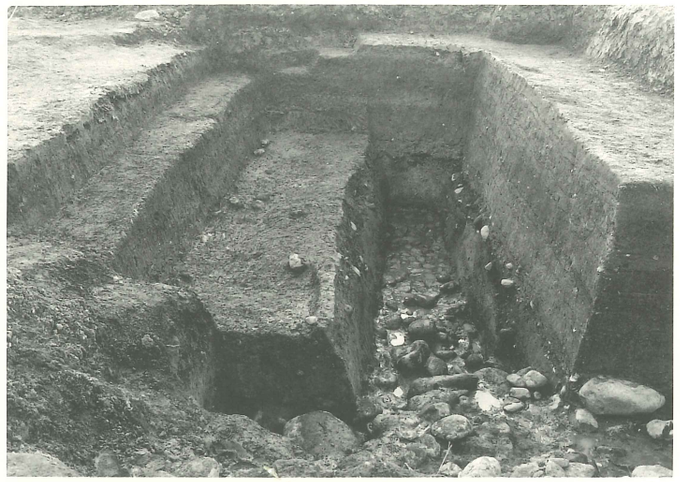
図９　手崎遺跡Ｅ地区下層出土遺物（2/3）

F地区竪穴住居群（南から）



E地区 縄文時代遺物出土状況（南から）

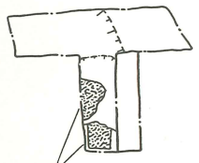




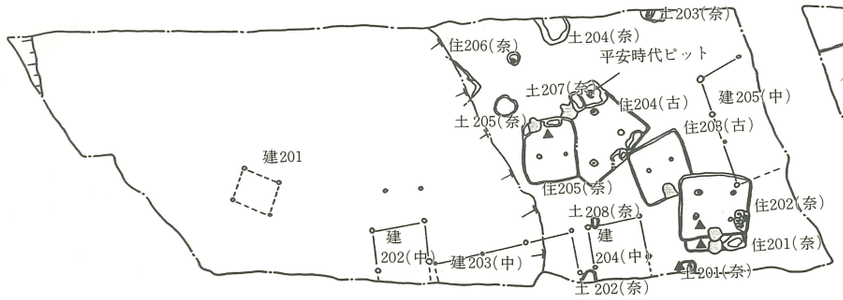
湧水谷（東から）

Ｆ地区竪穴住居群（南から）

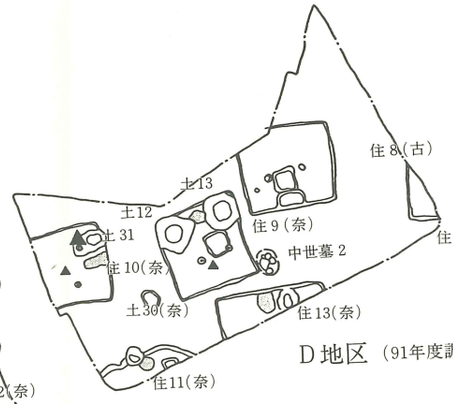
Ｅ地区 縄文時



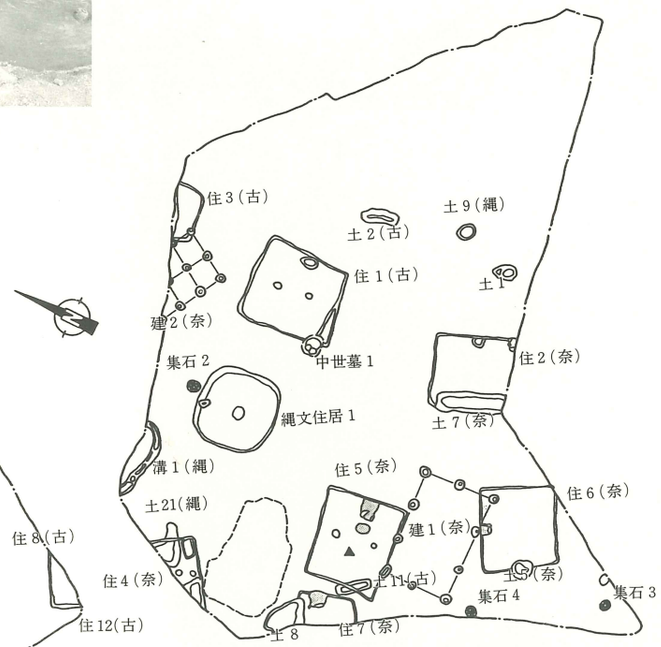
湧水谷



Ｆ地区

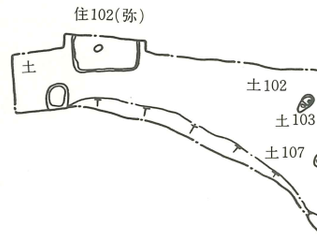


Ｄ地区（91年度調査）



Ｃ地区（91年度調査）

▲：製塩土器出土遺構



遺物の様相から、両者は同一のものと考えられ、ローム上面付近に生活面があり、砂層中のものはそこから遊離したものと思われる。土器はほとんどが無文であるが、外面に横位の帯状に山形押型文が施文された土器がわずかに出土した(図9－2)。この土器は口縁端部にも山形押型文が施文されているらしく、内面はナデており無文である。層位的にも明らかに早水台式より下層にあり、いわゆる「川原田式」に相当するもので、九州における押型文土器群のうちもっとも古段階に位置づけられよう(註)。

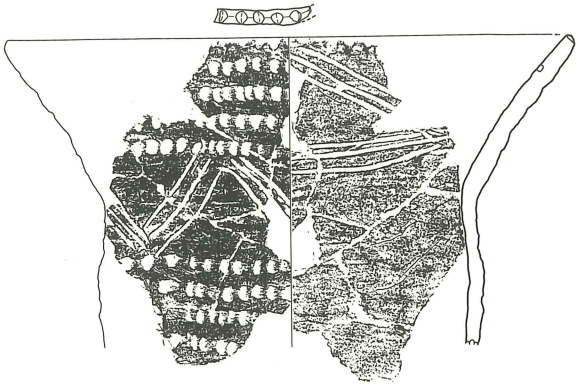


図11　手崎遺跡E地区出土塞ノ神式土器（1/4）

これに共伴すると考えられる石器に定型的なものは認められないが、大半がチャートなどの珪質岩である。なお、砂層中からは腰岳産黒耀石を用いた野岳休場型の細石核が1点出土している(図9-1)。本来、ローム上部～上面に文化層があったと思われるが、調査期間の都合上ローム層は20cm程しか掘り下げられず、その中から遺物はまったく出土しなかった。

図11は上部包含層出土の塞ノ神式土器である。大きく開く口縁部はゆるい波状になることも考えられ、屈曲部に稜は認められない。口縁端部に刻み目が、外面にヘラ状施文具による押引文と鋸歯状の沈線文が施されるが、口縁内面にも沈線文が施文されている。　(高畠)

(註) 賀川光夫「九州東南部」『日本の考古学』Ⅱ　1965

弥生時代

E地区北東端部で竪穴住居を1軒検出した。調査区境界付近だったため全掘できなかったが、一辺3.5m程の方形のものである。出土した土器の特徴から弥生時代後期後半から終末のものと判断される。なお、手崎遺跡のおける弥生時代の遺構は1次調査を含めてこれが唯一のものである。　(高畠)

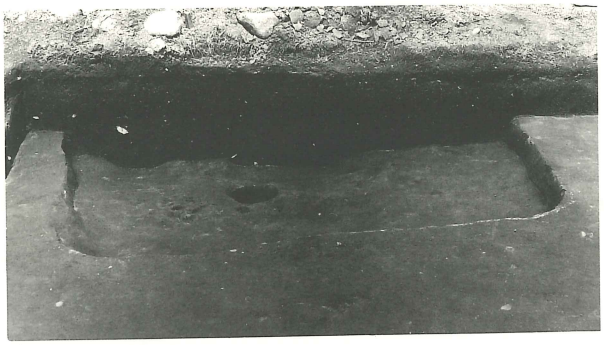


写真7　手崎遺跡E地区住居102

古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居をE地区で1軒（住101）、F地区で2軒（住203・204）検出した(図10)。いずれも方形の住居で一辺の中央付近にカマドを有するものと考えられる。

住居101は一辺4.5m程であるが、西半分が後世の削平のために失われている（写真8)。カマドは幸運にも削平を免れて遺存しており、煙道部が竪穴の掘り方より外に出る形式のもので、一辺の中央付近に設置されていたものと判断できる（図12)。袖の粘土は失われ、支柱も抜き取り痕しか残っていないが、右の袖石が原位置からやや離れて遺存していた。遺物は須恵器を含まず、

土師器のみである。床面付近で出土したものを示す(図13－1 ・2)。1は甕で口縁部は肥厚することなく外反気味に開き、胴部内面は口縁部直下までヘラケズリを施すものである。2は小形の高坏で、脚部外面に縦方向の、内面に横方向のヘラケズリを施し、脚部の内面屈曲部は面取する。坏部と脚部の屈曲は明瞭である。なお胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。これらの特徴と須恵器が出土していないことから、5世紀中葉の須恵器出現期頃にまで遡る可能性を考えたい。大分県内の他地域では、これまでのところ、この時期にまで遡るカマド遺構の例は知られていないようである。大分平野では、カマドをもつ住居は5世紀後半から末葉に古式須恵器を伴って出現する。大分市稙田市遺跡L区の3号・9号住居跡などがこれにあたるが、それらと同時期のL区10号住居跡はカマドではなく地床炉をもつ。また、5世紀中葉から後半とされるL区6号住居跡では須恵器もカマドも伴わない(註1)。さらに住101とほぼ同時期と考えられる大分市下郡遺跡SH－1では、陶質土器を伴出しているがカマドは伴っていない(註2)。宇佐平野においても、カマドをもつ住居は5世紀後半に遡る古式須恵器を伴う例しか知られていない(註3)。したがって、住101は大分県内でもっとも古いカマドをもつ住居の一例となろう。ただし、すぐ西隣の筑後地域では4世紀末にまで遡るカマド遺構が検出されており(註4)、日田地域の地理的位置を考えれば、首肯されることである。

写真8　手崎遺跡E地区住居101

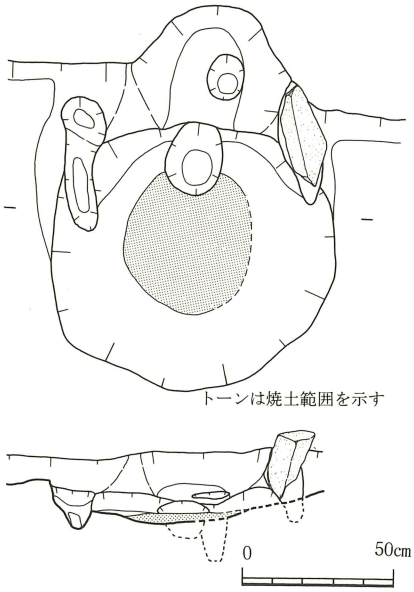


図12　住居101　カマド実測図

住居204も同規模の住居であり、カマドも似た形式である。(写真9)。奈良時代の住居205に大きく切られており、住205の貼り床の下からも本住居に属するとみられる遺物が出土している。図13－3はカマド内から出土した小形の甕で、

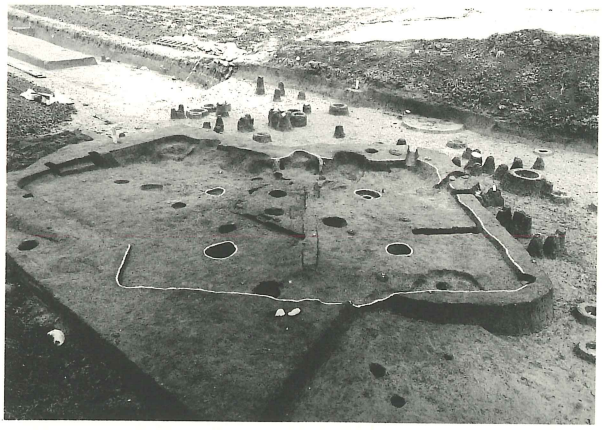


写真9　手崎遺跡F地区住居204（左は奈良時代住居205）

やや長胴のものである。胴部内面は口縁部の少し下までヘラケズリされる。ここでも須恵器は出土しておらず、住居101に近い5世紀後半代と考えたい。

住居203は3.4m×3.4mの小形のもので短辺側にカマドをもち、住居204をわずかに切っている（写真10）。カマドは煙道部が竪穴の掘り方から外に出ない形式で、袖石の一部や支柱石、焚口の天井石が残っていた。遺物は須恵器瑳、土師器甕・甑等が出土し、特に甕は数個体が住居廃絶後に投棄された状態で出土した。図13－4は床面より出土した瑳で、口縁部径が胴部径より大きく、陶邑編年ＭＴ15型式の短頸のものにあたると思われる。したがって6世紀前半に位置づけられる。

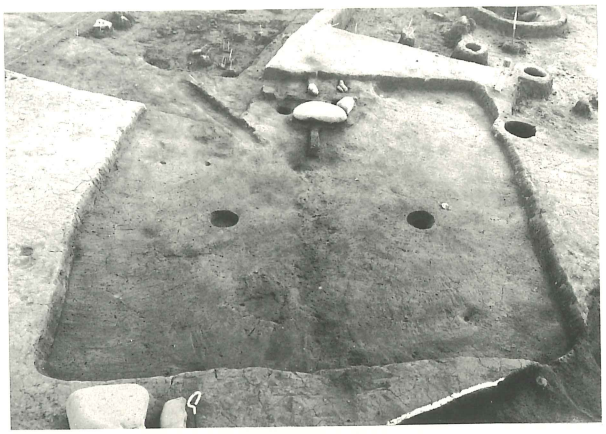


写真10　手崎遺跡Ｆ地区住居203

（高畠）

（註1）大分県教育委員会1992「稙田市遺跡Ⅳ」
（註2）大分市教育委員会1991「下郡遺跡群」大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報（2）
（註3）宇佐市教育委員会1993「別府遺跡8次調査」『宇佐地区発掘調査概報』
（註4）馬田弘稔1985「塚堂遺跡Ⅳ」福岡県教育委員会
＊土器の編年観については、大分市歴史資料館の高橋徹氏、大分市教育委員会の坪根伸也氏および県教育委員会文化課の諸氏より御教示を得た

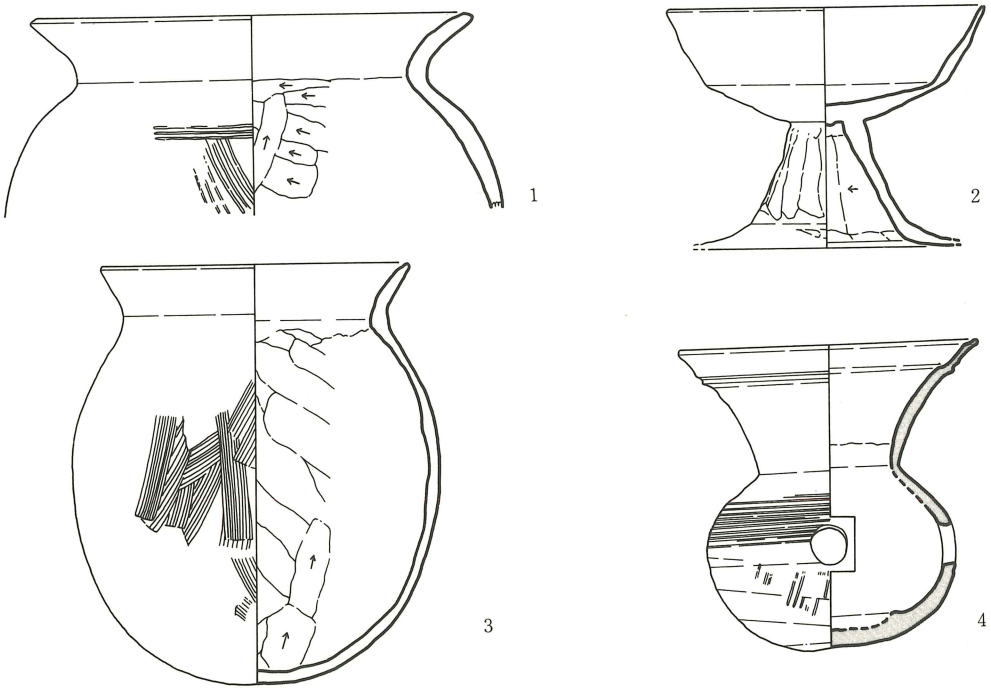


図13　手崎遺跡古墳時代出土遺物（1/3）

歴史時代

奈良時代の遺構はＦ地区で竪穴住居３基と土壙を９基検出した。竪穴住居は、いずれもカマドをもつ方形の住居であるが、床面積は10～14㎡と、前回調査したＣ・Ｄ地区の該期の住居に比べ小規模なものである（図10）。住居201と住居202は切りあっており、201→202の順序で作られている（写真11）。どちらも主柱穴は４本で一辺の中央にカマドをもつ。住居205は最も小形の住居で、主柱穴は２本である。カマドは短辺の隅に近い部分に偏って設けられている。これらの住居からは須恵器坏蓋、土師器甕・坏・椀、逆錐形の焼塩用製塩土器、石製紡錘車などが出土しており、その主なものを以下に示す（図14－1～3）。須恵器の年代観から、これらの住居はいずれも８世紀中葉を中心とする時期に営まれたものと考える。土壙は40～50cmの深いものが多く、住居から離れて掘られている。土器の小片や焼土・炭化物が出土するものが多く、これらは元々の機能はともかく、最終的にはゴミ穴として用いられたものであろう。しかし、時期のはっきりわかる遺物が乏しいため、年代についてはなお問題を残している。なお、前回の調査でＣ・Ｄ地区の住居や土壙から同型式の焼塩用製塩土器が出土したが、今回の調査でも、全ての住居と土壙201から破片が出土した（図10）。今後、製塩土器の消費地遺跡でのありかたの一例を示すものとなろう。

写真11　手崎遺跡Ｆ地区住居201・202

平安時代の遺構は、Ｆ地区で検出した柱穴状のピット１基だけである。これは住居204の埋土の上から掘り込まれており、完形に近い土師器椀、土師器甕の破片とカマドの袖石様の焼石が出土した。図14－4は、出土した土師器椀で、底部は回転ヘラ切りによっており、口縁端部がわずかに内湾して内面側がやや肥厚するなど９世紀前半代の特徴を示す。

中世の遺構としてはＦ地区の堀立柱建物３棟（建物202・203・204）が考えられる。これは柱穴の大きさや柱間の距離から推定したもので、遺物による裏付けを欠いており、本報告時に改めて検討したい。

この他Ｅ地区の溝101・102は畑の境界溝と考えられる素掘の溝で、近世のものとして理解しておく。

（高畠）

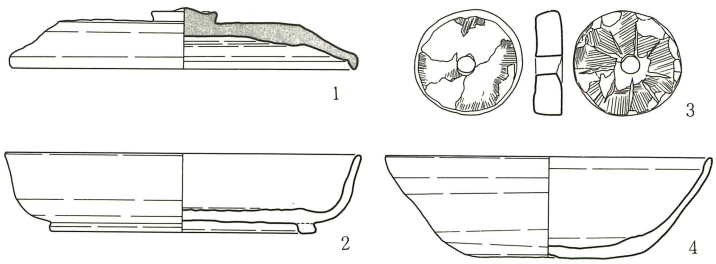


図14　手崎遺跡奈良・平安時代出土遺物（1/3）

湧水谷の調査

谷の旧流路と想定される部分には、近世以前にも湧水を利用した水田の存在が予想されるため、これに平行・直交する２本のトレンチにより確認調査を行なった。その結果、古代にまでさかのぼる水田または水田様の土層が確認され、さらにそれ以前の植物遺体堆積層を検出した（図 15）。

３層は 1920 年代に周辺の台地上が水田化した際かさ上げされた土であり、古代・中世の遺物を多量に含んでいる。土の採取先は隣接するＦ地区の削平された部分だと考えられ、ここに該期の遺構が存在していたことを示している。

４～９層は砂質土をはさみながらほぼ水平に堆積したシルト質土層である。4 層には酸化鉄濃集層が数枚認められ、近世以降には乾田に近い状態であったことがわかる。一方５～９層には酸化鉄濃集が認められず、湿田であったと考えられる。９層下部より出土した須恵器坏は体部が直線的に開いて口縁部はわずかに外反し、底部は回転ヘラ切り後にナデて仕上げている（図 16）。他にも８世紀代の須恵器も多く出土しているので奈良時代まで遡ることも考えられるが、先の遺物からすくなくとも９世紀前半には谷が湧水を利用した水田であったと考えておきたい。ただし畦畔は検出されていないため花粉分析の結果を待って水田かどうかを判断したい。

12 層と 16 層は植物遺体を多量に含む層で、11 層をはさんで上層とは不整合に堆積している。特に 12 ａ層と 12 ｄ層は植物遺体のみからなる褐色の泥炭層で、木の枝葉がそのまま残っていた。またドングリ・トチなどの堅果類も各層から出土した（註）。これらの土層は谷を流れる水による侵食によってえぐられた基盤礫層の凹みに、堆積したものであろう。堆積時は、縄文後期と見られる土器片が 12ｂ層から出土し、11 層上部からは古墳時代後期かと思われる須恵器が出土していることから、その間のいずれかの時期であろう。

（註）畑中健一氏からイチイガシが多いとの御教示をうけた。

（高畠）

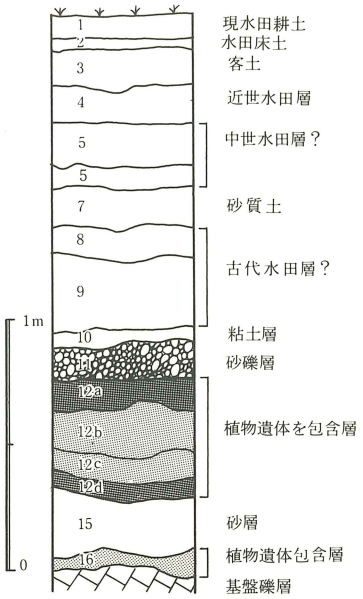


図 15　湧水谷土層模式図

写真 12　花粉分析資料の採取

図 16　湧水谷出土遺物（⅓）

V　まとめと課題

今年度調査した上野第１遺跡の畑地境界溝と手崎遺跡の湧水谷水田の調査をふまえて、三隈川南岸地域の湧水谷水田と畑地の開発の状況を概観し、通史的に位置づけてみたい。

湧水谷の水田開発

湧水谷とは日田地域に発達する段丘上に点々と所在する湧水からの水が流れ下る際に開析した狭い浅い谷である。地形の特徴として、山地から段丘面への変換点に湧水点が存在するため、段丘面上では緩い傾斜の浅く広い池状の地形になるが、段丘の斜面を開析する際には急傾斜で狭く深い谷となる。したがって湧水点に近い段丘上の部分のほうが開発しやすい状況である。

そのような湧水谷は、三隈川南岸地区では西から長者原段丘に１箇所、上野段丘に３箇所、陣が原段丘に１箇所、手崎地区に2箇所現在知られている。そのうち弥生時代後期に開発が始まったと考えられる場所が、長者原と手崎「ひやけの田」の２箇所、古墳時代前半期が陣が原、奈良時代の開発開始が上野第１遺跡の湧水谷である。そしていったん開発されたあとは中世近世を通じて水田が維持されている状況を、上野第１遺跡と手崎遺跡で確認している。このような状況からみて湧水谷の開発は弥生時代後期に始まり、次第に高く奥まった段丘上の湧水谷へ広がり、奈良時代にはほぼすべての湧水谷が水田化されたと推定される。

段丘面の畑地開発

段丘上は現在ほとんどすべて水田化されているが、この景観は1910～20年代の大規模な耕地開発によるものであった。その際水田化されたのは手崎地区・陣が原・上野地区であった。丘陵上は現在水田下されているため平坦な景観を呈しているが、それ以前は畑地として利用されていたことはあきらかであり、畑地時代の地形は１～２ｍの差の起伏をもつ地形であったことが上野第１遺跡で確認されている。丘陵上の森林が伐採されはじめるのは縄文時代にさかのぼるが、弥生時代でも丘陵の奥まった場所でも伐採用石斧が点々と採集されており、畑地は集落の周辺に限られていたと想定される。

このような状況は古墳時代でもあまり変わらなかったと見え丘陵上には古墳群が作られている。したがって丘陵上では起伏の多い微地形に応じて利用しやすい場所を選び、畑地は点在的にひろがっていたものと推定される。このような状況は古代中世を通じても変わらなかったようではあるが、水路開削の可能な低位段丘では、高瀬地区と惣田地区で井堰を高瀬川に作り段丘面を水田化しようとしている。それ以外の場所では前記のような畑地の状況であったが、中世には量的には拡大したようで、上野地区と手崎地区では集落が台地上に進出している。その後段丘上の畑地開発が大きく進行するのは、近世に入ってからで、17世紀では畑地部分に陶磁器片をかなり採集できるようになり、その量は18世紀特にその後半となると急増し、急速に段丘上の全体が畑地化していったものと推定される。18世紀後半には丘陵全体に畑地境界溝が掘られ、地形に応じて畑地を長方形に区分していく。この状況は上野地区で顕著でこの時代に作られた畑地の境界はその区画を20世紀の広域水田化まで維持されることになる。

日田盆地南岸の開発史

今年度の調査も含めての日田バイパス関連調査において各時代の集落・遺構・水田・畑地区画溝など

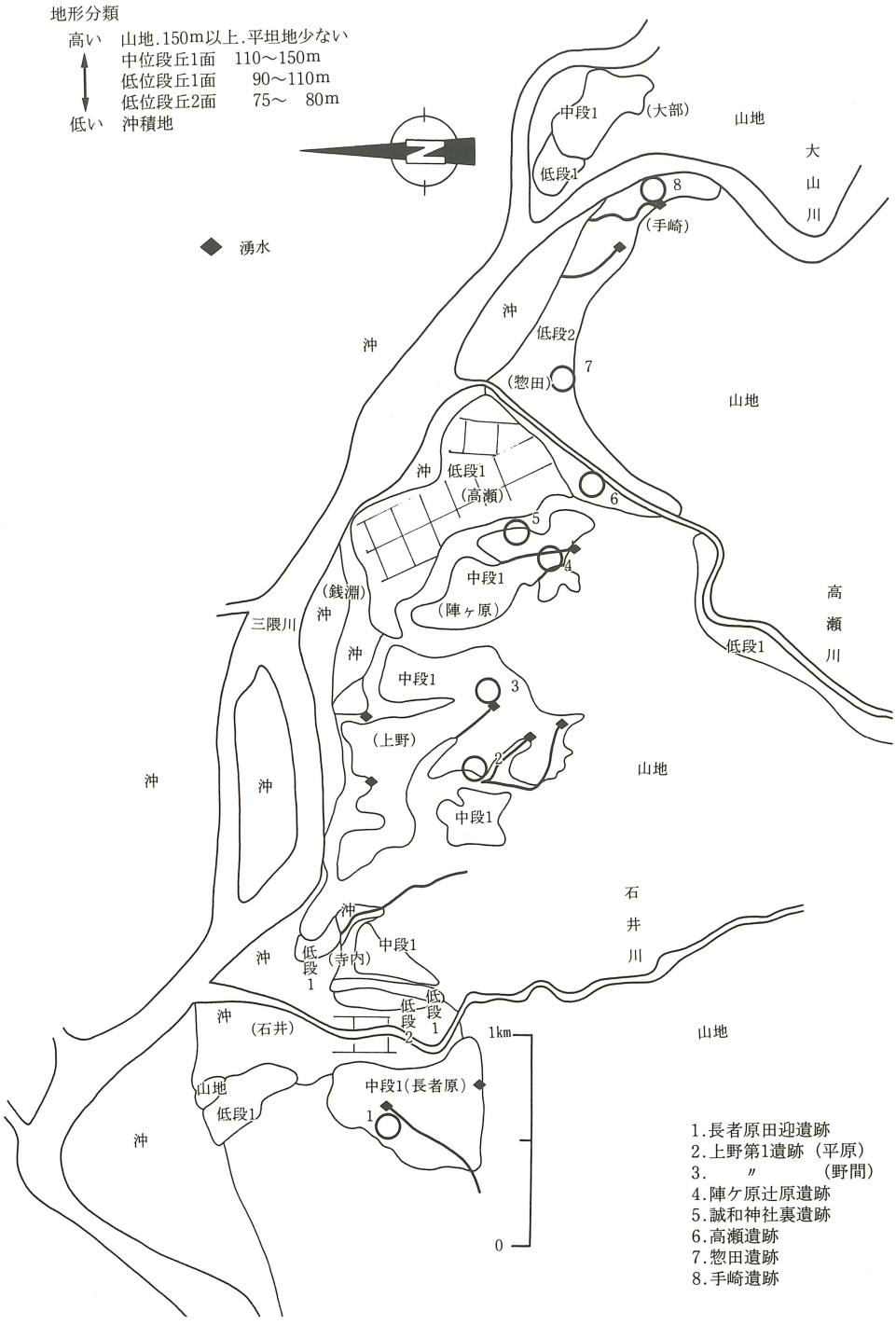


図 17　三隈川南岸の地形
（千田昇「日田・玖珠地域の地形」『日田・玖珠地域-自然・社会・教育-』
1992. 大分大学教育学部 . を改変）

を検出した。その位置を地形と関わらせることでこの地域の弥生時代以降の開発史の輪郭を描くことが可能である。時代ごとに概観していきたい。

1期　弥生時代前中期　この時代の居住域は丘陵上に立地しているが、まだ湧水谷の水田化は行なわれておらず、河川の沖積地縁辺での水田と集落周辺の畑地さらに河川での漁労や山地での狩猟などの生業を分散した生活形態が想定される。

2期　弥生時代後期から古墳時代　湧水谷の水田化が低位段丘上から開始され、次第に中位段丘の湧水谷に進んでいく段階である。しかし、畑地はまだ集落周辺や段丘上の適地に限られていたらしく、段丘上には古墳群が作られている。石井川流域の小河川流域の沖積地ではこの時代から水路開削による水田化がいち早く展開した可能性がある。

3期　奈良時代から平安時代前半　奈良時代までに各段丘上の湧水谷の奥まった部分は水田化され尽くし、水田化は主に低位段丘上や洪水を受けにくい沖積地に、高瀬川や石井川のような小河川に井堰をもうけて水路を引き、大規模な水田化をめざした時期である。しかし必ずしも成功しなかったようで石井地区では条理地割りが石井川の流路変更で分断されており、消滅した条理の可能性がある地区(惣田地区)もある。律令国家による国家主導の開発が行われたが、在地においてそれを維持するだけの力のない時代ともいえる。しかし高瀬地区や日田盆地の北部や東部では条里が維持されており一定の成功を収めた場所もあったと想定される。

4期　平安時代後半から中世　この時代の特徴は従来の方法では開発が不可能であった沖積地の氾濫原に近い地域の水田開発が行われる段階で、日田市荻鶴遺跡では11世紀ごろの水溜め遺構や鎌倉時代の水田遺構が検出されている。これは文献記録の「別府」開発に対応するものと推定される。さらに低位段丘上の条里遺構が安定化する段階が鎌倉時代である。それは高瀬条里内に在地豪族高瀬氏が館をかまえたことが地名と紀年銘石塔類から推定されるほか、惣田地区の低位段丘面の水路開削による水田化が、普門寺の建設時期からみてこの時代までさかのぼる可能性があることから推定される。また中世には段丘上の畑地の開発も前進したようで、手崎遺跡では屋敷墓をもつ宅地がたてられたり、上野地区では地名からみて丘陵上に集落が前進してくる。

5期　近　　世　この時代までにはすでに水の得やすい湧水谷や小河川からの水路開削による低位丘陵や沖積地の開発は終了している。したがって、水田化は従来の水田を石垣などを作って切り添えていくもの、河川流路の固定化による旧流路の水田化、中心河川からの井路開削などにより河川敷・中州の水田化などに向かう。同時に畑地の開発が急激に進行し、水田化できない段丘上の全面的な畑地化が行われ、18世紀には畑地境界溝をくまなく段丘上に掘り、畑地の地割りが行われる。この状態は大正時代までつづく。

6期　近　　代(1910・20年代以後)　大山川上流からの大規模な井路開削で、手崎地区・陣が原段丘・上野段丘がすべて水田化される。この段階が現在の景観となっている。

このような状況が日田盆地全体で普遍化されるかどうかは今後の調査に関わってくるが、小河川流域の水路開削による水田化は条里施行以前の弥生時代後期から古墳時代にかけてかなり行われていたようであり、その具体的姿の解明が最大の課題となろう。

謝　　辞

今年度の調査に際しまして、以下の方々のお世話になりました。

日田市立博物館

日田考古学同好会

長順一郎（日田市文化財調査委員）

（大宮町）安養寺正雄　小関　幸一　仁田野　一　仁田野益蔵　横尾　敏男

宇野アサエ　宇野　京子　宇野ヒトエ　宇野真由美　梅木　鈴子　江田美代子
梶原ミトシ　木下カネヨ　木薮　ふみ　武内ヒロエ　坂本都美子　高尾　清子
刎　留三　原田　国介　原田　友枝　益永　勇　松本加代子　毛利四郎三
毛利十四男　毛利　真　横尾テル子　横尾ノブ子

一般国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ

上野第１遺跡（平原地区・米田地区）
上野第２遺跡
手崎遺跡（２・３次）

1994年3月31日

発　行　大分県教育委員会
〒870　大分市府内町3－10－1
TEL 0975－36－1111(代)
（大分県教育庁文化課）
印　刷　有限会社 みつわ商事